上紋峠の周辺で進む国内最大規模の風力発電計画を追う【第7回】

「風発はハーートラップでは」自ら考え動き始めた地元住民



オホーツク管内滝上町の住民有志による学習会に招かれた佐々木邦夫さん（北海道風力発電問題ネットワーク代表）が生成AI「Copilot」で作成した、滝上側から見た上紋峠風力発電所のイメージ画像。尾根筋に沿って巨大風車が林立する

オホーツク海側と日本海側との分水嶺に位置する上紋峠の周辺に計画された、再生可能エネルギー（再エネ）業界大手のグリーンパワーインベストメント（GPI。本社・東京）による、陸上型では国内最大規模の風力発電所の開発事業。すでにオホーツク管内滝上町では企業側による説明会が3回開催されたが、ここにきて、説明を聞かされる立場だった地元住民が再エネ事業に明るい佐々木邦夫さん（石狩市在住）を招き、上紋峠周辺での計画の問題点を聴く学習会を開いた。巨大風車が乱立する宗谷管内での実態を語った、豊富町の若手酪農家・田中真生さんによる講演要旨と併せて紹介する。

（ルポライター・滝川 康治）

風発建設による影響を学ぶため滝上の町民有志が初めて学習会

9月5日夜、再エネ業界大手のGPIによる陸上型では国内最大規模となる風力発電所の計画が進む滝上町内で、町民有志が企画した初めての学習会が開かれた。

滝上在住の会社役員・飯尾純市さん（75）の呼びかけに応じ、町内外から参加したのは約50人。事業者からの説明だけでなく、風発事業が先行する各地の事例に学ぼう――との趣旨で、再エネ問題に明るい佐々木邦夫さん（北海道風力発電問題ネットワーク代表）を招いた。

冒頭、学習会を企画した飯尾さんが参加者に向けて、

「今年3月に事業者の説明会で計画について聞き、滝上町始まって以来の環境破壊が起きるのではないかと直感し、（計画に対して）風見鶏や日和見主義になってはいけないと感じた。『（風発で）地域が活性化する』という言葉は住民に対するハニートラップ。このまま進んでいくと『今だけ、金だけ、自分だけ』になるのではないか」と語り、学習会の参加者が今後、風発事業に対する意見を清原尚弘町長に伝えていくよう呼びかけた。

明らかにされない問題点を指摘静かに広がり始めた住民の関心

講師の佐々木さんは、稚内に住んでいた頃は風発建設に賛成したが、風車による騒音被害に遭ったことをきっかけに調査を始めた体験を紹介。巨大風車が林立する宗谷管内や北見市の常呂地区、現在の居住地・石狩市での再エネ事業などの問題点を、データや資料を基に語った。



風発事業の問題点を紹介する佐々木さん（9月5日、滝上町内で）

上紋峠周辺での建設計画については、「地すべり地形が点在する場所はリスクが高く、地形が複雑な上紋峠一帯の尾根部を改変すると、大雨の時に土砂が河川に流出し、オホーツク海に流れ込む。そうした問題点について、事業者がきちんと答えてくれるのだろうか。普通の企業は事業形態を決めて予算を作るけれど、ここでは『計画の途中だから分からない』と説明したようだ。これでは地元の知らないうちに計画が進むことになりかねない。もっと住民に内容を知ってもらうべきではないか」などと警鐘を鳴らす。そして、まだ明らかにされていない問題点をとして、以下の項目を挙げた。

＊バードストライク（野鳥の衝突事故）など猛禽類に対する影響

＊冬季間の発電所のメンテナンス

＊災害時の交通アクセスの確保

＊岩尾内湖（ダム湖）や渚滑川水系に流入する濁水のリスクや、旧鉱山跡地からの重金属の流出対策

＊環境影響評価書の印刷やダウンロードなどができない、現行の環境アセスメントのあり方

＊紋別港で陸揚げした風車機材を上紋峠に輸送する際のルートなど

こうした事柄について、「住民の懸念に対し、事業者から明確な回答をもらえないことが一番の問題。さまざまな疑問点について、法律で決められた以外にも場をつくり、納得できる説明をしてもらうことが大切です」と締めくくっていた。

今回行なわれた学習会は、水資源や環境に対する影響のほか、機材搬入道路の工事にともなう土砂災害、芝桜公園からの景観の破壊、低周波音による人体への悪影響――などを理由に挙げ、6月下旬に清原町長に意見書を提出した飯尾さんが単独で準備を重ね、一部町民の協力を得て開催にこぎ着けたもの。参加者の大方は滝上町民で占め、巨大風力発電所の建設計画に対する静かな関心の広がりを窺わせた。

学習会終了後の9月中旬、町が主催する「町長カフェ」が開かれ、15人ほどの町民が参加した。

清原町政が誕生した23年から3カ月に一度開いており、来春に統一地方選を控えることもあり、今回（第11回）が最後。町側から行政の取り組みを紹介し、参加者との懇談を行なってきた。今回の「町長カフェ」では、女性の参加者による建設反対の意見が目立ったという。

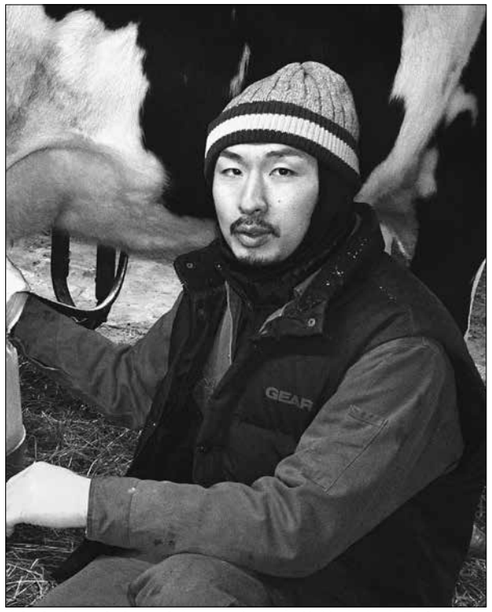
9月の町議会で再選立起の意向を表明した清原町長が、この問題に対し、いつ、どんな見解を述べるのか注目されるところだ。

学習会を企画した飯尾さんは、「今回の講演で町民が初めて、ほかの地域で起きている実例を学ぶ機会になった。これからも、問題点を伝えるチラシの配布や、学習会などを継続していきたい」と話す。

滝上町では、建設計画を疑問視する住民グループを創ろうと模索する動きも芽生えており、今後の展開から目を離せない。

豊富町の若手酪農家・田中真生さんが語る風発建設の影響

道北の自然豊かな大地や酪農を風車群の餌食にしてはならない



（たなか・さねいき）1989年、宗谷管内豊富町生まれ。2007年に地元の高校を卒業後、北海道立農業大学校（本別町）に進む。途中、青年海外協力隊員としてフィリピンで酪農の普及などに従事して帰国。13年に同校研究科を卒業後は、民間企業勤務や実家での就農を経て、20年に牧場「たなか家」を立ち上げた

「立ち退き発言」に住民が憤慨

２０２０年に新規就農した、豊富町内で最も小さな牧場「たなか家」では、牛が牛らしく生き、輸入穀物に依存しない、安心で安全な純国産の牛乳を生産することを目指しています。規模や量を追い求めず、少量でもより価値のあるものを生産しようと、（日本では主流の）ホルスタインだけでなく、ガンジーやジャージー、ブラウンスイスの乳牛もそろえ、家族が生活できる適正規模の酪農を経営方針にしてきました。

豊富町内には、21年から現在までに62基の大型風車が建設され、その9割近くが（業界最大手の）ユーラスエナジーHDのものです。わが家から約１・６キロ離れた場所には、陸上風力では日本最大規模といわれる「芦川ウインドファーム」（31基）が建設されました。

宗谷総合振興局によると、管内６市町村では現在、合計２３９基の風車が稼働し、約65万キロワットの発電能力があるといいます。人口３千６百人（千６百世帯）の豊富町全体の年間消費電力（一般家庭分）は５７６万キロワット程度と試算できます。４千３百キロワット級の風車１基の年間発電量は１１３０万キロワット程度。町内で必要な電力は、芦川ウインドファームのわずか1基分で十分足りるのです。

宗谷管内には、環境アセスメントの対象が５７５基もあり、合計８１４基という物凄い数の風車が建つかもしれません。わたしの牧場の周辺でも、来年から29年にかけての着工を目標に、新たに2百基近い風力発電所計画が進行中です。

宗谷に風車が乱立する理由は、

＊1年を通して風が強く、発電効率が40％近くになるので、投資案件として有力視されている

＊製造国の中国から直接稚内港に部材を運んで仮置きし、そこから設置場所までの距離が比較的短くてすみ、建設コストが安い

＊住民からの反発が少ない

といった点が考えられます。

芦川ウインドファームなどを運転するユーラスエナジーは、住民説明会を何度も開催していますが、こんなやり取りがありました。

住民側が風車による被害が解消されない場合の対応について聞くと、「騒音などの対策を講じて解消されない場合、立ち退いてもらうしかありません。（関連費用については）法廷でやり合うしかないですね」

と、責任者が発言。先代から酪農経営を引き継いだ我々のほうが立ち退く話になるので重ねて問うと、「それしかない、と断言させてもらいます」と言い放ちました。

また、中国で風車を造らせ大量の石油を使って輸送し、自然破壊をして風車を建てることが再生可能エネルギー事業なのかを問うと、「自然破壊ではなく自然の改変。皆さんたち酪農家も、山を削って牧草の種子を蒔いて収穫するでしょ。それも自然改変です」

という答えが返り、我々は怒りを爆発させました。



牧草地や住宅の近くに林立するユーラスエナジーＨＤの風車群（豊富町福永地区で）

野生動物への影響や通信障害も

巨大風車の建設にともなう変化として、次のことが挙げられます。

①これまで見られなかったヒグマなど野生動物が人里へ頻繁に出現するようになった。弱ったタヌキやアライグマが畜舎に入ってくるなど。

②（建設時などの）テレビや携帯電波への通信障害の発生

一昨年７月、妻が経営していたチーズ工房（直近の風車までの距離は約１・６キロ）の通信機器の不具合が一斉に発生しました。こうした出来事が大きな打撃となり、妻は「営業上のリスクを抱えてまで、工房を続けられるのだろうか…」と悩み、会社側に強く抗議しました。

ユーラスエナジーは、芦川ウインドファームの周辺の各地区に対し、３百万円ずつお金をばらまきましたが、使途が明確ではありません。「どんな主旨のお金か？」と担当者に尋ねると、「（風車の）引っ越しの手土産と思ってください。ご挨拶がわりに受け取ってほしい」とのことでした。これは地域の分断になります。ある地区は会館や神社の改修費用に、３戸しかいない地区では百万円ずつ分けあう…。一方で、該当しない地区にはお金が入りません。

わたしは20年に新規就農したので、周囲の方から「就農前なら、お金をもらえたのに…」と言われました。会社側には「たかが１地区３百万円のお金」でしょうが、我々や地域のおじいちゃん、おばあちゃんにとっては、住民同士の分断につながりかねないやり方になるわけです。

犠牲を払うのはいつも過疎地

大型風車の建設後の被害として、次のことを懸念しています。

・利尻富士や豊富町の大規模草地（公共牧場）の景観悪化

・警告灯の点滅にともなう不快感

・シャドーフリッカー（風車が回転する時に太陽の光が遮られ、地上に明暗が繰り返し生じる現象）

・低周波音による頭痛ほか

・建設時の道路拡張などによる環境への影響

・気候に対する影響

昨年８月26日、豊富町から天塩町にかけて線状降水帯が発生し、河川に近い牛舎では浸水被害が発生しました。また、同年11月13日の降雨の時には、芦川ウインドファームの上のほうだけに雨雲が掛かる様子が見えた。それ以来、ずっと風車と雲の動きを観察していますが、互いに関係があるようです。

道北の自然豊かな大地や酪農を巨大風車の餌食にしてはならない、と強く思います。経済活動を優先した結果、いつも犠牲を払うのは過疎地ではないでしょうか。

巨大風車が建ってから声を上げるのではなく、水面下で動いている計画をきちんとウォッチして、企業側に説明会を開かせるなどの行動に移すことが大切です。

数年後に控える新たな巨大風車群の建設に対し、宗谷全体でしっかりと住民が向き合う必要があります。酪農地帯で起きている問題を、「他人事」から「自分事」として考えることが何よりも求められます。

将来の子や孫に対して説明がつかない生き方ではなく、恥ずかしくない社会を見せてあげること――そうしていくことが、わたしたち大人の仕事だと思っています。

（9月8日、さっぽろ自由学校「遊」再生可能エネルギー講座での講演内容を要約）